

第2節 日本鳥類目録の変遷

日本鳥類目録の変遷

森岡弘之（国立科学博物館名誉研究員）

日本鳥類目録（以下、単に鳥類目録という）は、学会誌「鳥」（現・日本鳥学会誌および、Ornithological Science）と並んで、日本鳥学会の代表的出版物である。初版は学会創立10周年記念行事として1922年に出版され、以後10年ごとに改訂・増補される予定で、戦前に第2版（1932）と第3版（1942）が刊行された。戦後は、経済的その他の理由で10年ごとではないにせよ、第4版（1958）、第5版（1974）、第6版（2000）が刊行され、第7版が現在準備中である。

単一の出版物として90年間にわたって存続したこと自体希有のことだが、そしてまだまだ存続しつづけることであろうが、この間にわが国では唯一の鳥類目録でもあった。したがって、鳥類目録と言えば日本鳥学会の目録であり、評価もきわめて高い。しかし、日本鳥類学の歴史において、日本鳥学会の目録が唯一の鳥類目録であったわけではない。

日本鳥類学の歴史は、ごく大雑把にみて、3期を識別することができる（森岡1997. 日本動物大百科4, 鳥類II, 平凡社）。日本鳥類の科学的研究は、C. J. Temminck & H. Schlegel (1844–50, Siebold's Fauna Japonica, Aves) を嚆矢とする。第1期は、以後明治の中頃まで、外国人が独占的に日本鳥類を研究した時期である。第2期は、日本人の鳥類研究者が台頭し、外国人の研究者に取って代った。飯島魁（東京大学理科大学教授）はその先駆者であろう。第3期は、日本鳥学会の設立（1912）と学会誌・鳥の発刊（1915）以後である。どの時期にも、その時期に適応した研究と鳥類目録があった。なお、本稿では著者や版によって種とされたり亜種とされたりした場合もそのままとし、著者の敬称は省略した。

第1期の研究と鳥類目録

P. F. von Siebold（ドイツ人の医学者で1823年から6年間滞日）および彼の後継者 H. Bürger（ドイツ人薬剤師）が集めた標本を研究したのが前記 Fauna Japonica, Aves（日本動物誌鳥類）で、120枚の原色図版とともに178種の鳥類を記載している。

これが日本鳥類の分類学的研究の始まりだが、これに少し先立ち Temminck (1820–39) は Nouveau recueil de planches coloriées（原色世界鳥類新図譜、通常 Pl. col. と略称される）で日本から多くの新種を記載した。Temminck（ライデン博物館長）と Schlegel（ライデン博物館の脊椎動物学者）はともにオランダ人だが、日本動物誌鳥類も原色世界鳥類新図譜もフランス語で書かれている。

Temminck と Schlegel 以後明治の初めまでは、日本の鳥類の研究は空白だった。鎖国のために標本の収集や輸出ができなかったからである。しかし、明治になると外国人動物学者の来日や研究発表が活発となった。この時期、日本鳥類の研究に特に貢献したのが H. Seebohm（大英博物館）と L. Stejneger（アメリカ合衆国国立博物館）の2人であるが、R. Swinhoe（廈門および台湾・淡水のイギリス領事）や W. T. Blakiston（函館滞在のイギリス人貿易商；犬飼，1932，札幌博物学会会報12（4）参照）の名も落せない。

Seebohm は採集家 P. A. Holst（高橋1935. 台湾博物学会会報25（145号）参照）を日本に派遣して標本を集め、日本本土だけでなく、対馬、小笠原・硫黄諸島、琉球列島の鳥類も調査した（Ibis, 1879–92）。さらに、1890（明治23）年には The Birds of the Japanese Empire を出版した。この著作は第1期の研究の集大成にあたる労作である。一方、Stejneger は日本人研究者の波江元吉らが採集した標本により多数の重要な論文を発表した（Proc. US Nat. Mus., 1885–94）。

Swinhoe は中国や台湾で採集しているが（高橋，1935，台湾博物学会会報25（136/139号）参照），主に Blakiston の標本に基づいて北日本の鳥類も研究した（Ibis, 1863–77）。Blakiston 自身も北日本や千島列島の鳥類を研究したが（Ibis, 1862–63），津軽海峡を境に北海道と本州の陸鳥類の分布が異なることを発見した（Trans. As. Soc. Japan, 1883）ことで有名である。北海道と本州の間の分布の境界線は後にブラキストン線と命名された。

さて、最初の鳥類目録は Blakiston と H. Pryer が共著の A catalogue of the birds of Japan（Ibis, 1878:

209–250) であろう。この目録の改訂増補版が同じ共著者による *Birds of Japan* (Trans. As. Soc. Japan, 10: 84–186, 1882) であり、さらにその改訂版が Blakiston 1 人が著者の *Amended list of the birds of Japan* (1884, Taylor & Francis, London, 68 pp.) である。日本産鳥類 (千島列島を含む) は catalogue では 313 種、*Birds of Japan* では 326 種、*Amended list* では 351 種となる。これらの目録はいわゆる annotated list (注釈付リスト) の体裁をとり、学名 (catalogue と *Birds of Japan* では和名もある)、産地 (分布地)、生息状況などが記載されている (原記載の引用や学名のシノニミイはない)。これらの目録から当時どんな鳥が日本から知られていたかが分かるが、学名 (特に属名) は古いものなので、専門家でないでと解説しづらいであろう。この 3 編の目録ではよく引用されるのは 1882 年の著作である。

第 2 期の研究と鳥類目録

第 1 期で日本人学者の研究が皆無であったことにはいくつかの理由がある。すなわち、標本 (特に同定に必要な比較標本) や文献が十分でなく、研究者の育成もおくれていた。しかし、最大の要因は研究しても発表の場がなかったことであろう。東京動物学会 (現・日本動物学会, 1885 年設立) の動物学雑誌 (*The Zoological Magazine*, 以後「動雑」) が発刊され (1888, 明治 21 年)、初めて研究発表が誰でもできるようになった。東京帝国大学理科大学紀要 (*Journal of the College of Science, Imperial University of Tokyo*) というものもあったが、発刊が 1887 年で動雑より 1 年早いだけであり、動物学専門の出版物ではなかった。なお、東京動物学会からは 1897 (明治 30) 年に英文専門の日本動物学彙報 (*Annotationes Zoologicae Japonenses*, 以後「彙報」) も発刊されている。

動雑の第 1 巻には早くも飯島魁や波江元吉 (東京教育博物館、後に帝大動物学教室助手) の論文が出ている。したがって、動雑の発刊が第 2 期の始まりである。もちろん、第 2 期以降にも外国人による研究はあったが、外国人の研究は第 1 期でほぼ終わったと言えよう。動雑の第 1 巻から第 32 巻 (1889–1920) に出版された鳥類に関する論文や記事の総目録があるが (黒田 1921. 鳥 11 号)、目を見張らされる。ただし、最近にヤンバルクイナの発見などがあったにせよ、日本からの鳥類の新種の発見は第 1 期でほぼ終わっている。日本人の鳥類分類学者には新亜種しか残されていなかった。

内田清之助の日本鳥類図説 (1913–15, 警醒社) は、あたかも第 1 期末に Seebohm (1890, 前述) が現れたように、第 2 期の最後を飾る重要な著作である。日本人が著した最初の日本鳥類誌 (“*Avifauna Japonica*”) であり、版を重ね、正編上・下 2 冊と続編でミクロネシア以外の日本領土の鳥類を記載している。種数は正編が日本・南樺太・千島の鳥類で 609 種・亜種、続編が台湾と朝鮮の鳥類で、台湾 349 種・亜種、朝鮮 379 種・亜種となっている (1925–27 年の増訂 4 版による)。

日本人による最初の鳥類目録は飯島魁の日本鳥目録 (*List of the birds of Japan*) (動雑 3: 英文後付 1–33, 1891) である。403 種 (追加の 3 種を含む) が記載されているが、学名 (学名の著者の年はない)、英名、和名の羅列だけで、他に何もなし。

飯島に次ぐ日本人による第 2 の鳥類目録は小川三紀 (東京大学医学部解剖学教室助手) の *A hand-list of the birds of Japan* (彙報 6: 337–420, 1908) である。これは、上記の飯島の目録と違って、学名 (学名の著者の年はない)、和名、学名と一部の和名のシノニム、産地 (分布地) があり、502 種 (ごく少数だが、この数字は亜種を含む) を記録している。範囲は小笠原・琉球を含む日本と千島で、樺太・台湾 (朝鮮も) は入っていない。産地と分布地は別の概念だが、古い文献では区別がむずかしい。例えば、Sapporo は産地だが、Hokkaido はどちらでもあり得る。小川の hand-list には生息状況の記述はない。

小川三紀は有能な鳥類学者であった。動雑 7 巻 83 号 (1895) に初論文を発表して以来、多数の論文を書いている。なかでも南西諸島の鳥類の研究 (1905, 彙報 5 巻) は、ルリカケスの再発見やオオトラツグミなどの記載を含み、今日でも欠くことのできぬ文献である。しかし、比較的若くに亡くなったので (日本鳥学会設立以前に 32 歳で死去)、飯島のような名声を得られなかった。飯島は鳥類学者も含めて多くの学者を育て、後に日本鳥学会の初代会頭も勤めた。

第 3 期と日本鳥学会の鳥類目録

日本鳥学会は、飯島魁の提唱により 1912 (明治 45) 年に設立された。1912 年は大正元年でもあるが、設立時は明治 45 年である。設立後 2 年間ほどは会合や講演会を催すだけの学会だったが、1915 (大正 4) 年に会誌「鳥」が発刊された (鳥 79/80 号, 1962 参照)。その結果、動雑や彙報に加えて鳥類学の専門誌があることになり (今でもアジア

には鳥類学の専門紙はほとんどない), 当然研究者も増え, 研究も活発になった。ただし, 戦前は動雑にも鳥類関係の論文が少なくなかったが, 戦後の動雑は実験動物学や無脊椎動物学が主流となって, 鳥類学の論文は非常に少ない。

さて, すでに述べたように, 日本鳥学会の鳥類目録は初版が 1922 年に出版され, 以後 90 年間に 6 版を重ねている。したがって, 改訂増補も単なる記録の増減にとどまらず, 社会状況 (特に領土範囲) や分類学の進展を反映して各版がそれぞれ特色のあるものになっている。以下, それについて述べる。

(a) 書名: 各版とも原則として英文である書名は, 初版から第 4 版までが A hand-list of the Japanese birds で, 第 5 と第 6 版が Check-list of Japanese birds である。しかし, どの版も扉に「日本鳥類目録」も入っている。hand-list と check-list は同じ意味であるが, hand-list はやや古い英語で, check-list は現代的あるいはアメリカ的である。

(b) 地理的範囲: 各版の範囲は表 1 を参照されたい。樺太は北緯 50 度以南の南サハリン, 朝鮮は旧朝鮮で済州島・鬱陵島を含む, 台湾は澎湖諸島・火烧島・紅頭嶼を含む, 裏南洋は旧マイクロネシアである。第 2 と第 3 版の範囲がいちばん広く, 第 5 と第 6 版は現在の日本領土 (北方 4 島と尖閣諸島を含む) である。第 4 版は, アメリカが占領中の小笠原・硫黄諸島と沖縄以南の琉球列島が除外されている。

(c) 記録種数: もちろん地理的範囲にもよるが, それだけではない。マイクロネシア以外の種数が第 3 版が第 2 版より少ないのは (表 1), 種から亜種になったものが多かったためである。種は, 第 6 版の頃までは世界的に合併主義の傾向があった (例えば Peters や Bock の目録)。最近はまだ細分主義の傾向がある。それは, 種概念が「生物学的種概念」でほぼ合意されていたが, 昨今さまざまな種概念が主張されるようになったことと, さらに何の基準も持たずに単に違うから別種という輩が増えたためである。私はどちらかと言えば合併主義の方だったが, それは今でも正しかったと考えている。

記録種数は第 6 版では 542 種 (680 種・亜種) で, 対第 5 版比がそれぞれ 109.9% (108.6%) である。この増加分 (記録種の約 10%) はほとんどが「迷鳥」で, 繁殖種は新種のヤンバルクイナと, 亜種から種に昇格したリュウキュウコノハズクとウチヤマセンニュウの 3 種にすぎない。迷鳥のこの異常な増加は研究者や観察者が増えたためと言われているが, この時期は, 日本が経済大国であり, 活鳥の輸入天国であったことも見逃すべきではない (輸入した活鳥を業者が処分に困って放鳥した例もある)。

(d) 分類群の配列: 初版はアビ目で始まり, アトリ科 (ホオジロ科を含む) で終わっている。これは小川の hand-list とだいたい同じである。第 2 版から第 4 版まではスズメ目 (カラス科) に始まり,

表 1. 日本鳥類目録収録種類数の変化

版 (刊行年)	目	科	属	種	種亜種	範囲
初版 (1922)	26	61	387	504	788	日本本土, 小笠原・硫黄諸島, 沖縄, 樺太, 千島, 朝鮮, 台湾
第 2 版 (1932)	25	67	311	599	856	同上
	17	34	85	141	169	裏南洋 (マイクロネシア)
第 3 版 (1942)	25	67	291	577	893	同上
	18	36	86	147	194	裏南洋 (マイクロネシア)
第 4 版 (1958)	22	61	205	424	552	日本本土 (北海道～奄美大島)
第 5 版 (1974)	18	70	213	490	626	日本本土, 小笠原, 硫黄諸島, 沖縄, 南千島
第 6 版 (2000)	18	74	234	542	680	同上

第 1 - 第 5 版の数字は黒田 (1974, 第 5 版 緒言) による。第 6 版の数字は筆者による。数字は目録本文だけのもので, 付録などの分は含まない。

キジ目で終った。俗に Hartert 方式と呼ばれるもので、Hartert (1903-20, *Vögel pal. Fauna*) が採用した配列順である。戦前の日本の鳥類学者（特に黒田長禮）は Hartert の分類を金科玉条としており、少なくとも旧北区の分類群についてはほとんど彼に従っていた。しかし、彼は世界中からおそらく 1000 を越す新種・新亜種を記載し、鑑別学の泰斗ではあったが、分類学、特に種レベル以上の分類の権威ではなかった。

第 5 版は、近年各国で採用されている Wetmore 方式の配列（非スズメ目で始まり、スズメ目で終る）に変え、目・科は A dictionary of birds (Campbell & Lack, 1985) に拠った。また、属・種の分類は Vaurie (1959-65, *The birds of Palearctic fauna*) と Peters の目録第 10 巻 (1964)、第 15 巻 (1962) などになるべく準拠した。第 6 版は目・科・種の配列順は第 5 版のままで、新しく記録された迷鳥などを適当な位置に挿入しただけである。分類群の配列順は多分に人為的・便宜的なものであり（種は種概念による）、版ごとに変えると混乱が生じるだけであろう。

(e) 編集方針：初版と第 5・第 6 版は編集委員の分担執筆だが、第 2 版から第 4 版までは合議制である。すなわち、標本を持ち寄り、皆で検討した。山階 (1962, 鳥 79/80 号) は合議制を高く評価している。しかし、分担制も合議制もそれぞれ一長一短があり、合議制の方がすぐれているとは必ずしも言えない。そもそも多くの会議は馴れ合いである。もし本気で議論しようとするれば物事はなかなかまとまらない。外国の著名な目録（例えば Peters, Bock, AOU などの目録）でも、最終原稿は委員全員が回し読みするが、みな分担執筆である。しかし、第 2・第 3 版では合議制にメリットがなかったわけではない。ひとつは記録となる標本の所在の確認である（次項参照）。他は、1920-30 年代は羽山徳太郎らによって poor subspecies（ごく些少な識別不可能な差異に基づく亜種）が量産された時期で、これらの「不良亜種」に対応するには 1 人より多数の方が良かったのかもしれない。第 4 版の時は私も出席したが、標本の回覧もめったになく、お座りな会議だった。

(f) 記録の根拠：第 4 版までは記録はすべて標本に基いているが、標本が確認されれば出版されてない記録も採用された。前述の合議制は、未発表の標本記録を確認するためであったのである。第 5 と第 6 版では写真記録（セグロカッコウでは音声記録）も記録として認められた。その代り、

記録は原則として出版されたものに限った。目録は過去の記録の集大成なので、未発表のものを入れない方がいい。資料としては標本でも写真でもいいだろう。ただし、写真やテープの場合、誰が見ても聞いても確実に同定できるものでなければならぬであろう。

(g) 総合評価：初版は、目録につき物の学名、原記載の引用とタイプ産地、学名のシノニム（一部）、英名、和名、分布地（産地）、生息状況（一部）などの項目をそなえ、小川の hand-list より一層進化した完成した体裁の目録である。また、ミクロネシアを除く海外領土を含む。しかし、海外領土はもとより国内でも調査が不十分な時代で（例えば、黒田長禮 (1925) の琉球列島の鳥類の研究は初版より後）、内容的には未熟である。今では歴史的な価値だけであろう。

第 2 版は、評価が分かれる版である。山階 (1962, 前述) は、第 3 版をいちばん高く評価するが、第 2 版も非常に高く評価している。彼は第 2 版で初めて目録編集委員会に参加し、そこで合議制に出合って、大きな感銘を受けたに違いない。その結果、第 2 版の評価も高くなったのであろう。だが第 2 版と第 3 版を比較すると、内容的（情報量、信頼度）に大きな差があり、第 2 版は中途半端な面が目立つ。特に海外領土の鳥類は調査も分類も不十分である。第 2 版は初版と第 3 版との間の中間段階というのが妥当であろう。

第 3 版は当時としては非常によくまとまった仕事であり、内外での評価も非常に高い。種・亜種のかかなり完璧なシノニミイがあり（他の版ではシノニムは特別のものを引用するだけ）、これは現在でも有用である。

第 4 版は範囲を削られ、学名や分類も大部分は第 3 版のままで、魅力に乏しい。シノニムはほとんど省略されている。ただし、新しく「種の世界分布」と、生息状況（繁殖、冬鳥など）に加えて「現状」(status, 普通とか稀とか) の項目が加えられている。

第 5 版は難産だった。編集委員会まで作ったが、資金がなく、計画が大幅におくれた。やっと学習研究社がスポンサーになってくれることになり、文部省の補助金ももらえた。ところが今度は、期日までに原稿をまとめる目処がつかなかった。そこで委員の大半を差し替え、合議制を分担制に戻して、どうにか間に合せたのである。なお、第 5 版は鳥類目録のなかで唯一、英文と和文が別冊である。これは学研の販売上の都合だった（他の版

は日本鳥学会の出版)。前述のように、分類方式は Hartert 方式から Wetmore 方式に変えた (Wetmore 方式とは本版の緒言にある黒田長久の語だが、第 5 版の分類はむしろ Peters 方式あるいは Mayr 方式であった。Wetmore はカラス科を分類順の最後におくことに終始反対だった)。出版時の経緯もあって、この版は誤植が多く、頁類も多く、そのうえ 2 冊に分かれていたので (英文版と和文版で記述の一致しないところもあった)、使い勝手はよくなかった。E. Mayr が Auk の書評でほめてくれたが、それはお世辞である。後で見ると、鳥類目録として不満が多い。

第 6 版は現行の版である。日本国内での分布のほかに、第 4・第 5 版同様、種の世界分布も記述している。外来種は目録本体から取り除いた (他の版ではコジュケイやテッケイなどが日本の鳥類の間に入っている)。この版では、学名原記載の引用、タイプ産地、シノニミイなども全部取り除

いている。これらの項目は記載分類学が旺盛だった戦前には必要不可欠な事項であったが、今日では少数の分類専門家以外は用がなく、分類専門家は自分で調べればいい。不要なものを除いた結果コンパクトなサイズに収まり、第 4・第 5 版より使い易いと思う。分類群配列は第 5 版のままである。分布委員が大勢だったので記述の統一性や信頼度にはばらつきがみられる。目録にあっては学名の誤植は許されないが、この版にも 1 か所ある (オガサワラヒヨドリ)。これは、初校では正しかったのに、誰かが再校以後で誤って直したものである。

最後に、与えられたテーマは「日本鳥類目録の変遷」だったが、併せて日本鳥類学の発達も大まかに概観してみた。何故なら鳥類目録の変遷と鳥類学の発達とは不可分だからである。Blakiston の文献を複写してくださった鶴見みや古氏に深謝する。